

つながろう、そして守ろう

－ ふるさと大牟田の川・海・環境を守る子ども達の提言 －



実施担当者 大牟田市立玉川小学校
 主幹教諭 廣松 隆広

1 はじめに

大牟田市には、諏訪川、白銀川、大牟田川、隈川、堂面川という、5つの本流となる河川がある。本校の校区には、そのうちの一つである諏訪川の支流である鳴川が流れており、例年、4年生が総合的な学習の時間に川の環境調査を行ってきた。平成29年度からは、校区に白銀川が流れる上内小、大牟田川が流れる中友小、隈川が流れる吉野小、堂面川が流れる明治小との共同学習体制をつくり、それぞれ川について調べたことを交流する「5校合同川サミット」を位置づけ、子ども達の発信の場を確保してきたところである。しかし、数年、5校での取り組みを続けていく内に、教師も子ども達も「4年生では川の環境について学習をすることになっている」「他校と交流しなければならない」「川サミットをしなければならない」というように、主体的に学ぼうとする意識が薄れてきていた。そこで、「子ども達が自分で考え、行動する」ことを意識して学習を進めていくため、昨年度から2年間にわたって、以下に示す学習過程と4つの留意点について5校で共通理解を図り、改めて協働学習に取り組んだ。

導 入	【課題把握①】 ○5年生からの引き継ぎを通して課題をつかむ 【調査活動①】 ○校区の川の現状を自らの目で確かめる (水質・指標生物・透明度・ゴミ) 【整理・分析①】 ○結果を表にまとめ、他校の児童と交流、比較する。 【行動化①】 ○比較して分かった課題をもとに、自分達にできることに取り組む。
展 開	【課題把握②】 ○自分達が取り組んだことについて成果と課題をまとめ、もっと多くの人と協力する必要があることを理解する。 【調査活動②】 ○残された課題について、どうすれば多くの人が共感し、 【整理・分析②】 ○「5校合同川サミット」を通して、自分の考えを他校の児童と交流し、5校全員で取り組む共通実践を決める。 【行動化②】 ○みんなで決めた共通実践に取り組む。
終 末	【まとめ】 ○1年間の取り組みの成果と課題をまとめ、振り返る。

- (1) 【課題把握①】において、先輩からこれまでの取り組みの成果と残った課題を明確にした引き継ぎを行うこと
- (2) 【整理・分析①】において、各校の調査活動を比較する場を設定し、子ども達自身で新たな課題を見いだすようにすること
- (3) 【行動化①】について、子どもの「やってみたい」という思いを重視して、教師はその取り組みの成果と課題が明確になるよう支援すること
- (4) 【整理・分析②】において、大牟田市の川環境を改善するためのアイデアを出し合う場として「5校合同川サミット」を位置づけ、5校の共通実践を子ども達自身で決定できるよう教師が支援すること。

資料1 協働学習の学習過程

2 取り組みの実際

2-1 先輩達からの引き継ぎ (導入)

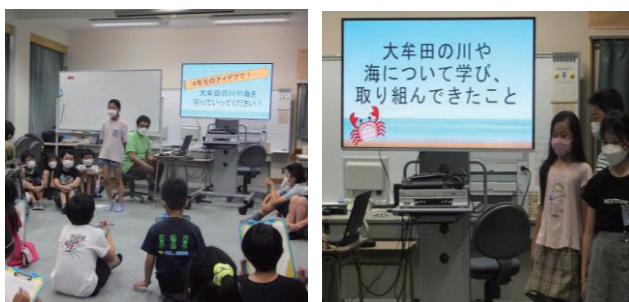
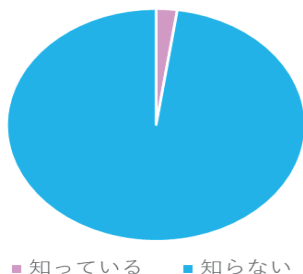


写真1 5年生の先輩達からの引き継ぎの様子



写真2 第1回川環境調査の様子

KUKプロジェクトを知っていますか (本校児童)



資料2 プロジェクト認知度のグラフ

2-2 自力解決の取り組み

川の調査やGTの話から「下流に行くほど水が汚れていること」や、ゴミの種類から「大人がゴミを捨てている現状があること」を知った子ども達は、その課題を改善するために自分達に何ができるかを話し合った。その結果、「まずは自分達の家で家庭排水の汚れを減らす取り組みを行うこと」「全校生徒に、家庭排水の汚れを減らす取り組みを呼びかけ、KUKプロジェクトについて知ってもらうこと」「みんなで校区を回ってゴミ拾いをする

これまで、導入の段階で課題をつかませる際には、各学校で作成されている指導計画に準じて課題把握を行ってきた。しかし、ある種マニュアルである教育指導計画に沿って学習を進めた結果、毎年子どもが変わってもする事は同じ事の繰り返しという課題が生まれていた。そこで、昨年度より5校全てで「先輩からの引き継ぎによる課題把握」を位置づけ、学習のスタートを切った。このことにより、自分達がすべきことが明確になり、第1回目の川調査に対する「先輩達の取り組みの結果、川の現状がどうなっているか」を調査するという目的意識が生まれた。漠然と川へ行ってGTの話聞くだけでなく、「水質 (COD パッケージによる酸素濃度)」「透明度」「指標生物」「落ちているゴミの量と種類」という4つの観点をもって、調査に取り組むことができた。子ども達は、自分達が思っていたよりも校区の川がきれいで、生き物が棲息しやすい状態であることに喜んでいて、やはりゴミが落ちていることについて懸念を示していた。また、昨年度実践を行った中で、5校みんなが決めたプロジェクト名「KUK (※K:川、U:海、K:きれいに) プロジェクト」や、「小さな努力で未来が変わる」というキャッチフレーズに関して、自分達を含めてほとんどの人に知られていなかったことが、大きな課題であることをとらえることができた。

川や川のまわりに落ちていたゴミ調べ				
明治小	中友小	吉野小	上内小	玉川小
プラスチック 家庭ゴミのポイ捨て ・茶碗 ・瓦 ・ペットボトル	【川の中】 ペットボトル ビニール袋 【川のまわり】 たばこ ビン 空き缶 マスク ビニール袋 お弁当のごみ	ペットボトル ボール 空き缶 茶わんのかげら	レジ袋 空き缶 われたガラス ビン	お酒のビン 空き缶 ペットボトル ・無糖コーヒー ・ジュース たばこの吸い殻 ライター お菓子のふくろ ガラス 鉄の種 アイツシュ お弁当のごみ 農業で出るゴミ カップラーメン 皿

資料3 5校分のゴミの種別調査

こと」が挙げられた。しかし、水質や透明度、生き物の生息状況に大きな変化はなく、ゴミを拾っても、日が経てばまた新たなゴミが落ちている、といった状況であった。この状況を変えるにはどうすればいいか、もっと多くの人を動かす方法を、みんなで考える必要があることを押さえ、「5校合同川サミット」への目的意識を持たせるようにした。

2-3 5校合同川サミットの開催

9月27日。本年度の「5校合同川サミット」を開催した。この川サミットでは、「自分達が調べたり行動したりした結果、明らかになっている課題をどうするか」を話し合った。それぞれの学校でゴミ拾いや家庭排水の汚れを減らす取り組みをやってみて、やはりどの学校も本校と同じように「もっと多くの人、KUKプロジェクトを知ってもらうこと」「大人の意識を変える必要があること」について課題を感じていたため、活発な議論が交わされた。「スポGOMIっていう取組があるんだけど、みんなでそれができないかな?」「プライバシーや肖像権に気をつけて、撮影したPR動画を Youtube に投稿したらどうだろう。」「FM放送局や新聞社に取材に来てもらうとかできないかな?」と自校だけでは思いつかないようなアイデアにふれ、子ども達も色々なことにチャレンジしてみたいと意欲を高めることにつながったサミットであった。

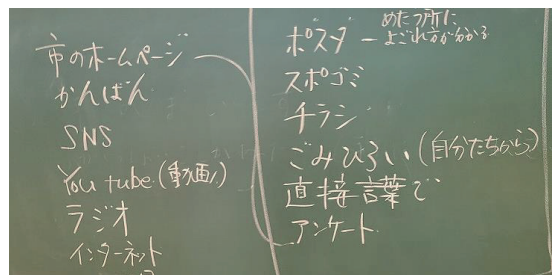


写真3 サミットでアイデアを出し合う児童

2-4 「スポGOMI in 玉川」の計画と実施・発信

5校合同川サミットでは、各校で地域に呼びかけ、「スポGOMI」を開催することが共通実践として決定した。5校同日で行う案も出ていたが、各校のスケジュールの兼ね合いから同日開催には至らなかったが、子ども達はやる気を持って計画や告知、当日の進行など頑張って準備に取り組む姿が見られた。2月25日当日は、他学年の子ども達や保護者、地域の方々までたくさんの方が本校に集まり、右の写真の通り、およそ一時間強のゴミ拾いで、市販の70Lゴミ袋20袋以上のゴミが集められた。ゴミ拾いの最中には、「このへん、同じコーヒーの缶ばかりだ。近くにお菓子の袋も多いよ。同じ人が捨ててるのだろうね。」



写真4 「スポGOMI in 玉川」の様子

「近い場所にたくさんゴミが落ちてくるってことは、落ちてるゴミを見て捨てていいって思う人がいるんじゃない?」と、ゴミの内容から多面的に考え、原因を推測する姿が見られ、子ども達の学びの深まりも感じられた。

当日、参加して下さった保護者や地域の方には、子ども達の学習の様子や美しい環境を未来へ残していきたいというメッセージが入った DVD をお礼として差し上げた。また、これらの活動について市の広報誌や新聞社が取材に来られ、先日、記事として発行された。少しずつ、子ども達の思いは広がっている。



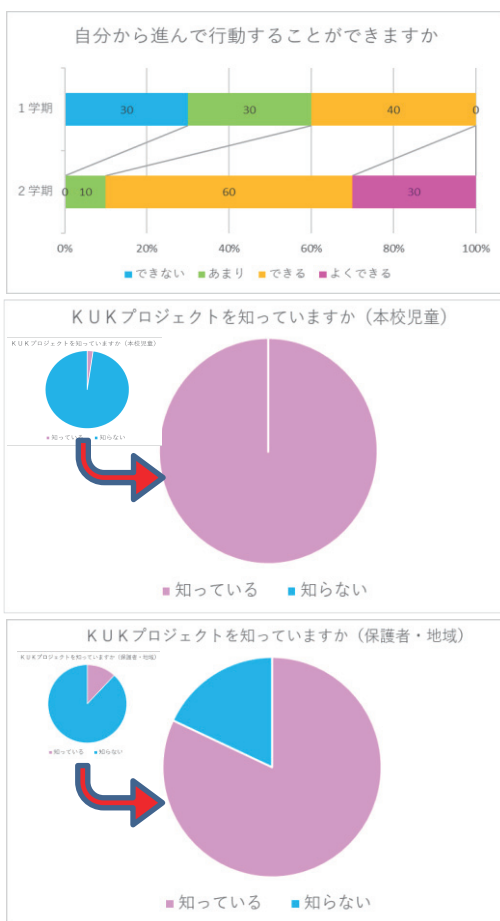
写真5 広報紙や新聞に取り上げられた学校紹介

3 まとめ

本実践を通して、子どもたちは川の環境を守ることに大変主体的に関わるようになった。特に、今回5校で共通理解を図った4つの留意点を意識し、教師主導ではなく、子どもたちの意思を尊重した指導を行ったことは、子どもたちの学ぶ意欲を向上させ、自分で考え行動する姿につながったと考える。

また、昨年度は地域の川環境を守るため、5校のみんなで考えたキャッチフレーズを入れたポスターの掲示を行ったが、ポスターだけでは環境保護の取り組みやKUKプロジェクトの認知度を上げることはできなかった。本年度はまず校内放送で繰り返しKUKプロジェクトの意味や環境を守る取り組みについて繰り返し周知したため、他学年の子ども達の意識が変わり、その保護者の意識が変わり、そして地域の方々まで動き出してくださった。市の新聞や広報誌も動きだし、多くの方が子ども達の活動に気づき、応援して下さるようになってきたところである。

本年度は叶わなかったが、子ども達の呼びかけによる清掃活動や提言活動が各校区で同時に行われたり、一カ所に集まって大規模に行うことが実現すれば、さらに多くの人目にとまり、大傘田市全体を巻き込んだ環境保護活動へとつながっていくはずである。次年度以降の実践で新4年生に学びをつないでいきたいと考えている。



資料4 児童や地域の大人の変容

謝 辞

本実践は、公益財団法人中谷医工計測技術振興財団の科学教育振興助成の採択を受けて実現しました。リモート交流のや広報活動、清掃活動における設備や道具の充実などはもちろんのこと、2会場での川サミット実現のための費用など、このようなコロナ禍においても子ども達が顔を合わせ、学びを深めることができたのは、中谷財団の皆様のおかげです。心より感謝申し上げます。